

“アメリカ”の地に立って思うこと

工学部 奥谷 昌之

本年度の UNO サマースクールの参加学生に対する説明会に同席して学生の質疑応答を聞きながら、ふと今からちょうど12年前の自分自身のことを思い出していた。当時、大学院生だった私は学会発表という名目で初めての外国、“アメリカ”の地に立った。そこでまず思ったことは、「大柄な外人ばかり、英語ばかり」（ここでは自分自身が外人であるわけで、よく考えてみると当然のことなのだが）、ということでひどく心細くなってしまった経験がある。今回参加した学生の大部分も、初めての外国ということもあり、大なり小なりそれぞれが不安を抱えての第一歩であったと思う。

さて当日、憧れのオマハに到着後、空港のバゲッジクレームへ向かう途中で「Welcome, Shizuoka Summer Tour!」（こちらの側から見ると“Omaha” Summer Tour と思うのだが）の横断幕を抱えた UNO の教職員と学生諸氏が我々を待ち受けていた。これに対して静大学生側の反応はといえば、「どうしよう?」といわんばかりの表情で皆が私の方を振り返り、私自身はこのサマーツアーに一抹の不安を感じずにいらなかった。しかし、さすがは“アメリカ”。その国民性というものが、現地のスタッフやボランティア学生の底抜けの明るさと包容力の前ではそのようなものは杞憂であった。

少人数の授業はテンポのよさに適度の緊張感もあり、あっという間に時間が過ぎてしまうようだった。そこには昨今の日本で問題視されている無気力・無反応の学生の姿はない。私語や居眠りをする者などおらず、否、そのような暇は無いといっても過言ではない。このような雰囲気のもと、学生の側にも日に日に現地になじんでいく様子が見受けられ、頼もしささえ感じられた。かつて先人達が欧米から様々な文物を学んで今日の日本を築いてきたわけだが、21世紀の現在に至っても“アメリカ”から学び取るべきことが多いことを実感した。参加学生も多く体験を通じ、自ら学び・考える機会が多かったのではないだろうか。

さて、その後のネブラスカ横断旅行やホームステイについての報告は学生に譲るとして、別の意味で

今回特に“アメリカ”から学ぶことがあった。

“アメリカ”では、ヨーロッパや日本に比べてゴミの分別に関して意識が低いようで、可燃物も不燃物も一緒に捨ててしまうケースが多い。大量生産・大量消費に裏付けされたアメリカ文化といえればそれまでである。しかし、工学部で環境問題に携わる研究者の端くれとしては、地球の将来を危惧せざるを得ない状況のように感じる。“アメリカ”滞在中、既にメキシコ湾沖に停滞していたハリケーン「カトリナ」は、我々が帰国後に南部を直撃し、多大な被害をもたらした。専門家からは、浪費型社会から大量に排出された二酸化炭素による地球温暖化との因果関係も指摘されている。“アメリカ”は自国の経済への悪影響の懸念から、二酸化炭素削減の国際協定である京都議定書から離脱してしまったが、今まさに転換期に来ているのではないだろうか。この分野では“日本”が将来、“アメリカ”の手本となる日が来るかもしれない。

今回は引率という特殊な立場からの参加であったが、“アメリカ”の地に立って改めて“日本”という国を再認識する機会を得ることができた。また、滞在中に大きな事故もなく、参加者全員が楽しい思い出とともに帰国することができた。このような貴重な体験をいただいた UNO のスタッフを始め、関係各位に心より感謝する。



Badlands 国立公園